

## 観音物語 (14) 欲望の牙

わくあくじゅう い によ 利 げ そ か ふ ねん び かん の ん り き しっ そう む へん ぼう  
若悪獣圍繞 利牙爪可怖 念彼観音力 疾走無辺方

若し悪獣に圍繞せられ 利き牙爪怖るべきも 彼の観音の力を念ずれば 疾く無辺の方に走らん

赤信号で停車しているときに、パジャマ姿の老婆が車の前で倒れた。信号が変わっても倒れたまま動かない。なにごとかとあわてて車を降りた。

「どうしたの？」

「千円…」

老婆は手を差し出して千円を要求した。詐欺だと思ったので拒否した。ところが老婆は車の前で倒れたまま起きない。哀れそうな眼差しで手を差し出している。まるで交通事故のような状況だ。通行人がジロジロと横目で眺めながら通り過ぎていく。しぶしぶ千円を渡す。老婆はすぐに立ち去った。やはり詐欺か。千円ならば誰でもすぐに出せる。しかし、パジャマ姿で町を歩いているのは異常だ。頭がおかしいのだろうか。哀れさがただよう面白い手口である。

買い物を済ませてスーパーの駐車場をバックして出ているとき、何かにぶつかった。驚いて車の後ろに回った。そこに男が無然として立っている。

「スママセン、怪我はありませんでしたか？」

「怪我はないが、買ったばかりの花瓶が割れた」

粉々になった花瓶の紙袋を持っている。

「スママセン、弁償させていただきます。いくらでしたか？」

「一万八千円」

少し高いと思ったけれども、支払わなければ警察に通報する口調である。事故処理になれば手続きが面倒だ。その場で現金を渡した。この手口は、安物の花瓶を割って準備された車の当り屋である。これもその場で現金が支払える範囲の巧みな手口である。

猛獣が牙や爪を立ててくる荒っぽい車上狙いもある。

「オーイ！」

走行中の車に手を振って大声を出す男がいる。何だろうと思って男の前で停車した。すると左側のドアを開けて片足を突っ込んできた。

「東京に帰るお金がないから二万円貸してくれませんか？」

丁寧な言い方である。しかし、片足を車に入れているからどこか怪しい。発車ができない状態だ。なにか危険を感じる。

「必ず返しますから貸してくれませんか」

「貸せません」

「これが私の免許証です」

「身分を明かされても貸すことはできません」

猛獣はポケットからナイフをちらつかせた。

ビー！ ビー！

警笛を鳴らす。男はびっくりして足を引っこめた。その瞬間に、ドアを開けたまま車を発進させた。これは脅迫窃盗罪になる荒っぽい手口だ。

以上は単独犯である。しかし、ライオン数頭が一頭の鹿を囲み、グループ組織で虎視眈々と狙う犯行も多い。手口は知能的になってきているから、くれぐれもご注意を！